

## 付記 平成6・7年の琵琶湖漁業の動向

平成6年の異常渇水にともなう9月の-123cmの湖水位低下と、翌7年5月の増水による+93cmの湖水位上昇は、1年もたたない期間に水位が216cm変動するという、琵琶湖漁業にとっても経験の少ない出来事であった。そこで、平成6年8月から8年3月にかけて、琵琶湖と共に生活してきている漁業者にとらえられた漁業の状況を記録しておくことは、今後の琵琶湖の動向について考える上で参考になるものと思われるので漁業者の談話等の形で列挙しておく。

- アユ資源培養事業として、昭和56年から実施されてきた人工河川活用事業は、アユの資源の安定もあって平成6年度は見送りの予定であったが、初夏からの記録的小雨渇水によって失われた産卵場を確保するため、琵琶湖のコアユ親魚の産卵適期にあわせ、姉川、安曇川人工河川を稼働させ、人工河川河口へ湖中の親魚を誘導、遡上、産卵させた。遡上のピーク時は降雨直前の9月10日から15日であった。（平成7年3月アユ資源培養協会）
- 平成7年6月期の河川に遡上したアユは砂をかんでおらず、今年は飴炊き用として出荷できた。天野川 200円/kg 安曇川・石田川300円/kg （各漁業協同組合）
- ホンモロコの大型魚（2年魚）がよく漁獲され、小型魚（1年または当才魚）が殆どとれない。（平成7年8月堅田漁業協同組合長）
- 堅田漁業協同組合では毎年1月15日に行われる新年会にホンモロコを出す慣例であるが、平成8年には不漁のためスゴモロコが代用された。
- 平成7年の春の大増水による洗堰からの全開放水は非常に大きく、南湖湖岸の水の流れが非常に速く、生まれたてのモロコの子が流されてしまったのではないか。（平成7年8月堅田漁業協同組合長）
- ウグイの稚魚が多量にとれるようになった。多雨による河川の通水により河川のかなり上流まで上り産卵が多かったのではないか。（平成7年8月堅田漁業協同組合長）
- スジエビを平成6年に約10t取り扱ったが、7年には4tであった。平成7年の4月までは何も感じなかったが、5、6月に少し少なくなったと思ったら7月からほと

んどとれなくなり、現在まで続いている。増水の放流によるのではないか。（平成8年3月朝日漁業協同組合員）

- スジエビは平成6年大漁であったが、7年にはさっぱりとれない。水草の枯死によるのではないか。（平成7年8月沖島漁業協同組合員）
- テナガエビのたつべ漁は、平成6年の9月中旬から11月20日頃まで今まで経験した事のない大漁でいつもの4倍量とれたが、7年はほとんどとれなかった。（平成8年3月朝日漁業協同組合員）
- ヨシノボリ（ゴリ）は平成7年7月から8月にかけてのエリでは殆どとれなかった。ゴリ曳きもあまり良くない。遅れているのかな。（平成7年8月沖島漁業協同組合員）
- ハスの漁獲は少ない。産卵時期におけるウの食害にあったためかな。（平成7年8月浜分漁業協同組合長）
- イサザは平成7年の春エリ、8年の初春エリと少しづつまじる量が増えてきている。（平成8年3月百瀬・今津漁業協同組合長）
- オオクチバスは、平成6年小型魚が少なかったが、7年にかなり増えている。（平成8年3月朝日漁業協同組合員）
- ワカサギは、平成6年7月以降、エリ、沖曳き、小糸網での混獲が目立つようになった。以降平成7年から現在に至るまで、混獲が増え続けている。（平成8年3月朝日・守山・堅田漁業協同組合）
- 北では藻がたくさんあって沖曳きができない。南湖には藻がない。堅田の組合長が、「エリがたわむほど水が流れ、藻がいっぱい引っかかった。南湖は藻が放流で流されてきれいなもんだ。」といていた。（平成7年10月百瀬漁業協同組合長）